教育学部生の教職イメージとその形成に関する一考察
ー現職教員の教職意識との比較をもとにー

学校構想サブプログラム
鶴岡　謙介

【指導教員】　宇佐見　香代　　関口　睦　　野村　泰朗
【キーワード】 学生の教職に対するイメージ　現職教員の教職意識　教員の適性への不安　理想の教師像

１．問題の所在及び課題設定

文部科学省(2021)によると公立学校教員採用試験倍率は14年連続で低下し、2021年度の全国平均は3.7倍で、1992年と同率で過去最低となった。

私は以前、教育学部以外の学生を対象に「職業選択において、なぜ大学生が『教員』を選ばないのか」と題して、職業選択を目前に控えた大学生が「教員という選択肢を考えない」または「教員という選択肢をやめる」ことの要因を探るべく、アンケート調査を行った。その中では、大学時代の教職課程(講義・演習・実習)や、マスコミ等の情報による、教職に対する負のイメージが主な要因となって、学生が「教員」という職業を選択しない場合が多いと分かった。さらに先行研究では、近年は教員養成を目的とする教育学部においても、教員採用試験の志願率が高いとは言えない状況が続いている実態があり、さらに教員を志望して教育学部に入学した学生の多くも、途中で「教員」という職業を選択しない現状にある。

そこで本研究においては、特に「教職に対するイメージ」(以下、教職イメージ)の在り方に焦点を当て、その形成についての問題点を明らかにする。教育学部生の「教職イメージ」と現職教員への意識調査を比較して、「これから教職を目指す若者」や、「教職に就くことに迷いがある若者」に対して、実際に教育現場で教職についている「現職教員」が持つ教職への意識や実態を伝えることで、学生が教職を選択する際の一助となるものにしたい。このことを通じて、学生の「教職イメージ」の形成に示唆を与えるような内容について考察を進めたい。

2.　「教職イメージ」の定義と研究方法

ここでいう「教職イメージ」とは、教育学部生が想像している教員の姿であり、将来自分がその職に就いた場合生じると考えられる状況を含んだ教職観である。志望する学生にとっては、将来憧れの対象として子どもの前に立っている自分の姿をイメージし、志望しない学生によっては疲弊している姿として想像されるところも含まれるものとして考える。

このような「教職イメージ」の形成について考えるにあたり、すでに教員として活躍している現職教員はそれぞれのステージにあって、教職に対してどのような意義、魅力、課題をもって職務についているのか、教職の充実のためにどのような学びを実践しているのかを調査したいと考えた。

そこで、今回は本学教育学部生158名へのアンケート調査及び実地研究協力校(中学校)の現職教員20名へのインタビュー調査を行った。この内容と、学生の教職イメージを比較して考察した。

３．先行研究より得られた示唆

（１）「教師の力量形成の変容」（関西国際大学、2019）

①教職選択時期、教職選択理由について

2011 年及び 2017 年に行われた川村光ら関西国際大学の質問紙調査より、主に教職意識について関連する事項を比較しつつ引用する。この調査は、2011 年は現職の小学校教員1154名と中学校教員727名を、2017年は小学校教員1605名と中学校教員1030名を対象に行われた調査である。

まず、教職を心に決めた時期について、択一式で尋ねた結果、2011 年調査と 2017 年調査の結果に共通する傾向として、小学校教師は「小学校の頃」、中学校教師は「中学校の頃」と、現在教職として勤務している学校種における学校段階の回答割合が高いことがあげられる。また、小・中学校教師ともに、進路について選択が迫られる高校時代や、直接子どもたちと関わる教育実習前後と回答している者が比較的多いと調査結果が出ている。

また、職業として教職を心に決めたきっかけについて、一番大きなきっかけは2011年も2017年も共に、学校種を問わず「個人の経験」である。つまり、個々の教職志望者の個別的で多様な経験が、教職選択の大きな動機になっている。C 県の小学校教師については2011年51.4%、2017年71.2%というように割合が増加しており、「個人の経験」から教職を選択する者が増えている。

一方、「教職の労働条件」「大学における課外の活動」「大学における授業」については2011年と2017年の間に有意な差はない。表 4 を見る限り、現役教師の教職志望のきっかけに関しては、大きな変化は起こっていないように思われる。しかし「大学における課外の活動」や、「大学における授業」の割合には、地域によって 5 ポイント以上の有意な変化がみられる。特に、A 県(小学校)、B 県(中学校)において「大学における課外の活動」の割合が大きく減少していることが顕著な結果である。地域ごとの大学の教職課程や課外活動、学習環境の違いや変化によるものもあると考えられる。この表に記載はないが、本研究では大学時代の経験、特に教育実習が大きく教職への志望理由に影響していると指摘されている。

教職選択理由（一番大きなきっかけ）

		A県		B県		C県	
		2011年	2017年	2011年	2017年	2011年	2017年
小学校	個人の経験	67.1	78.8	74.3	70.1	51.4 <	71.2
	教職の労働条件	2.4	4.0	5.7	3.1	5.4	4.1
	大学における課外の活動	13.4 (>)	2.0	2.9	2.1	16.2	8.2
	大学における授業	8.5	14.1	11.4	21.6	21.6	12.3
中学校	個人の経験	79.2	88.5	84.2	85.5	83.3	82.4
	教職の労働条件	0.0	1.9	0.0	7.3	5.6	2.9
	大学における課外の活動	8.3	5.8	7.9 (>)	0.0	0.0	2.9
	大学における授業	4.2	1.9	7.9	5.5	0.0	14.7

②教職意識の変化について

表10は、「現在のあなたの教職生活」について尋ねた結果である。すでに2011年時点で、小学校でも中学校でも「教師になってよかった」「毎日が忙しい」「仕事にやりがいを感じる」には9割以上の教師が、「慢性的に疲れを感じる」には8割以上の教師が、「あてはまる」と答えており、これらの数値は2017年になってもほとんど変化していない。これらの意識は、教師の間ですでに一般化しているようである。

対して、「仕事上の自由裁量が大きい」に関して、2011年は、小・中学校教師ともに66%程度の教師が「あてはまる」と答えたのに対し、2017年になると、中学校では有意な変化は見られなかったものの、小学校では72.6%が「あてはまる」と答えた。すなわち、この6年間に、「仕事上の自由裁量の範囲が大きい」とみなす意識が小学校教師の間で有意に高まっている。

教職意識の変化

		2011年	2017年
教師になってよかった	小学校	95.8	94.6
	中学校	93.6	93.2
毎日が忙しい	小学校	98.1	98.3
	中学校	98.3	98.2
仕事上の自由裁量の範囲が大きい	小学校	66.8 <	72.6
	中学校	66.3	68.2
慢性的に疲れを感じる	小学校	84.0	85.2
	中学校	81.5	84.1
仕事にやりがいを感じる	小学校	94.1	94.1
	中学校	91.6	92.1
世の中を支えている人材を育てている（2017年のみ調査項目）	小学校	—	76.2
	中学校	—	72.6

この、「裁量感」に対して、年代別に回答率を見ていくと、小学校教員は両年の調査において、経験豊富なベテラン教師よりも、若手教師の方が仕事に裁量感を持っていると答えており、中学校でも、2017年には5ポイント以上の有意差が確認でき、小学校と同様、若手教師のほうが裁量感を持つ傾向がある。

自由裁量の範囲が大きいということは、教師には高度な専門性が要求されることとなり、大量な業務量とは質の異なる負担感を感じさせることにもつながる。常に専門性と自律的な判断を求められることは、教師に絶えることのない向上心を保つようなプレッシャーをもたらすことが考えられる。仕事に対してまだ経験の少ない若手教員は特に自由裁量が多いが故のプレッシャーを特に感じていると考えられる。

教職意識の年齢別得点比較

		2011年調査				2017年調査				
		2011年 20代	2011年 30代	2011年 40代	2011年 50代	2017年 新世代	2011年 20代	2011年 30代	2011年 40代	2011年 50代
小学校	教師になってよかった	2.56	2.58	2.47	2.51	2.42	2.54	2.52	2.48	2.55
	毎日が忙しい	2.73	2.75	2.80	2.74	2.75	2.77	2.74	2.83	2.79
	仕事上の自由裁量の範囲が大きい	2.05	1.87	1.79	1.73	2.06	2.10	1.95	1.79	1.88
	慢性的に疲れを感じる	2.15	2.25	2.40	2.34	2.18	2.24	2.32	2.46	2.42
	仕事にやりがいを感じる	2.58	2.49	2.34	2.35	2.48	2.49	2.44	2.39	2.34
	世の中を支えている人材を育てている	—	—	—	—	1.83	1.94	2.00	1.93	1.91
中学校	教師になってよかった	2.49	2.62	2.43	2.40	2.46	2.41	2.52	2.45	2.49
	毎日が忙しい	2.82	2.80	2.78	2.69	2.79	2.79	2.79	2.74	2.68
	仕事上の自由裁量の範囲が大きい	1.89	1.91	1.71	1.78	2.03	1.97	1.73	1.77	1.78
	慢性的に疲れを感じる	2.22	2.29	2.37	2.20	2.26	2.36	2.31	2.32	2.16
	仕事にやりがいを感じる	2.53	2.50	2.31	2.23	2.54	2.40	2.42	2.31	2.31
	世の中を支えている人材を育てている	—	—	—	—	1.89	1.84	1.92	1.88	1.92

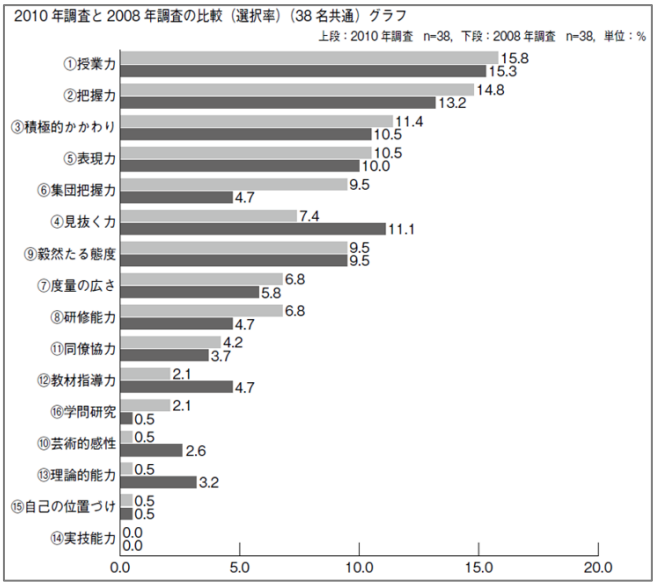
今回私が行う学生に対するアンケート調査においては、特に現職教員の多くが教職選択理由に挙げていた「個人の経験」に関連して、教員志望の有無にはどのような「個人の経験」が影響を与えているのかどうかを検討してみたい。

（2）「大学生の教育観・教職観の形成過程」（立教大学、2013）

2008年（3年次始め）から2010年（4年次終わり）にわたる前田一男ら立教大学による質問紙調査の結果から、学生の教育観・教職観の変化をまとめた。

学生の教職意識（教員に必要な力）について、共通回答者の10年調査の特徴は、08年調査から重要とされた「授業力」「把握力」「積極的なかかわり」の多くがそのまま高い回答率を得て順位変動が無いのに対し、「表現力」「集団把握力」の回答率順位が上がっていることが見て取れる。卒業を控えた4年生は教育実習や採用試験の経験を経て、より実践的な力量観に傾く傾向を示していると思われる。

2010年調査と2008年調査の比較（選択率）（38名共通）グラフ

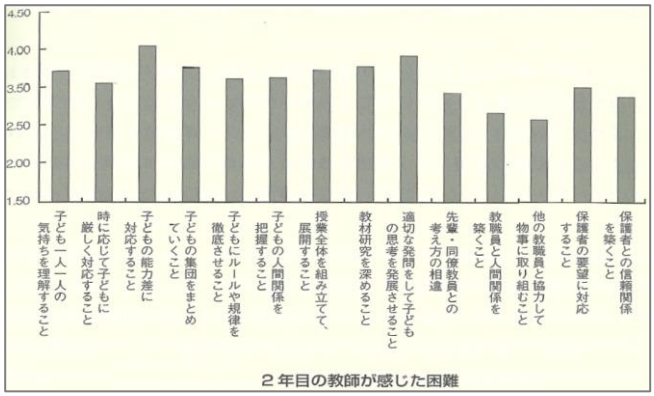


このように、実習を通してより実践的な力量観に視点が移り変わることによって、そこから「実際に自分が教員となり、実践できるのかどうか」という考えが強化されるものと推察できる。そこで本研究でも学生の思う重視したい仕事などを具体的に聞くことで、学生の持っている「教職イメージ」を明らかにしていきたい。

（3）「教師が学びあう学校づくり」脇本・町支(2015)

ここに、脇本健弘・町支大祐らによる横浜市教育委員会への質問紙調査の結果より、若手教員の直面している困難についての調査を挙げる。

特に値の高くなっている項目として、「子どもの能力差に対応すること」や「子どもの集団をまとめる事」といった集団に関する部分や、「適切な発問をして子どもの思考を発展させること」、「教材研究を深めること」「授業全体の組み立て、展開」などの授業に関する部分の値が高くなっており、これらが若手教員の困難となっているとわかる。



これらの問題は若手教員のみならず、先行研究（2）でも言及した、教員志望者が思う「自分も教員としてこのようなことができるのか」といった学生の教職イメージや、現職教員の持つ教職イメージにも影響していると考え、今回の各調査に当たっても教員の抱えている苦労に関しては調査していきたい。

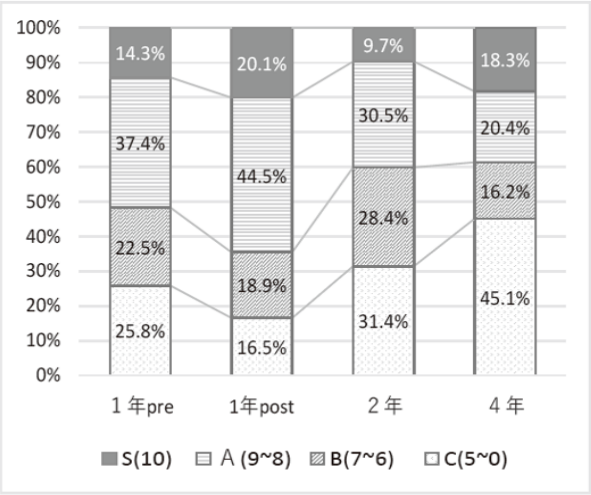
（4）「今後の教育学部における教職支援の在り方―教職志望率向上のための一考察―」（埼玉大学、2020）

2015 年埼玉大学教育学部学校教育教員養成課程入学者の「教師になりたい気持ち」の変遷を入学直後、1 年生前期、2 年生前期、4 年生後期の 4 年間にわたり追跡した質問紙調査から、学生の教職志望者の推移を見ていく。

教師になりたい気持ちをあらわす数値の分布について、1 年生は最も教員になりたい気持ちが高いことを表す S や最も教員になりたい気持ちが低いことを表す C の両極端の意見が少なく、その間の教員になるか迷っている A や B の割合が大きく出ているが、特に教員になりたい気持ちが一定以上ある A の割合が特に高くなっているのが分かる。その後、2 年生では S の割合が最も低くなっており、教員になりたい気持ちが高くない B や C の割合が多く見られ、4 年生では明確に教員になりたい気持ちが定まり、両極端の S や C の割合が高まっている。

【平成 27 年度入学生の 4 年間の教職に対する意識の変化】

教師になりたい気持ち（類型）	1 年 pre	1 年 post	2 年	4 年
S（10）	14.3%	20.1%	9.7%	18.3%
A（9 ～ 8）	37.4%	44.5%	30.5%	20.4%
B（7 ～ 6）	22.5%	18.9%	28.4%	16.2%
C（5 ～ 0）	25.8%	16.5%	31.4%	45.1%



【平成 27 年度入学生の 4 年間の教職に対する意識の変化】

全体の傾向としては、教員になりたい気持ちで入学した入学直後や 1 年生の教員志望率が高く、迷っていた学生が大学生活を通して、進路に対して視野が広がった 2 年生頃に教員になる以外の選択肢を考え始め、教職への意識が下がる学生も多く現れ、さらにその後、教育実習を経て教員採用試験、もしくは就職活動を終え、進路を確定させる過程で「教員になる」、「教員にはならない」といった両極端の意見に分布していくという指摘がされていた。

今回の学生に対するアンケート調査においては、このような教員志望度の大学生活を通しての揺れ動きに対して、先行研究（1）でも記述した、「個人の経験」に焦点を当てて、それぞれの実体験に基づいた教職イメージを明らかにするべく、志望度別に状況の調査、考察を行った。

以上の先行研究からの考察として、私が特に注目したいのは、先行研究（1）で述べた、「個人の経験」の重要性である。

実際、私が以前行った教育学部以外の学生を対象とした調査では、特にマスメディア等の報道による情報から教員という仕事に対してのイメージを作っている傾向が見られたが、実際に教員になっている人々は、そのような外部からの情報よりも、自身の実体験を理由に教職を選んでいることが分かる。「個人の経験」や実体験が不十分な場合、マスコミなどの情報や言説に教員志望が左右されてしまうので

はないかと思われる。そのような実体験を通すことで、自分が教員になったときの前向きな具体像を生み出すことが出来るのではないかと考え、どのような体験を通して学生が教員になるか否かを決めているのかを含め、本研究を進めていきたい。

４．教育学部生に対するアンケート調査

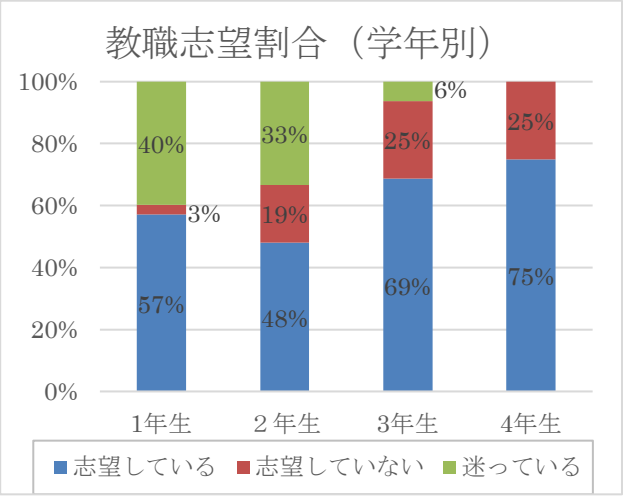
上記を踏まえ、本学教育学部生 158 名に対して質問紙を用いたアンケートを行った。調査内容は以下の通り。

調査内容

（全体に対して）
・教員を志望しているか
・職業を選ぶにあたり最も重視したいと思う評価基準
（教員志望者に対して）
・なぜ教員を志望しているのか
・教員になった際に重視したい仕事(選択式)
（教員を志望していない学生に対して）
・いつから教員を志望していないのか
・なぜ教員を志望していないのか
（教員になるか迷っている学生に対して）
・いつから教員になるか迷っているのか
・なぜ教員になるのを迷っているのか
※「職業の評価基準」については選択式、「教員志望状況の理由」については記述式を採用している。

調査結果

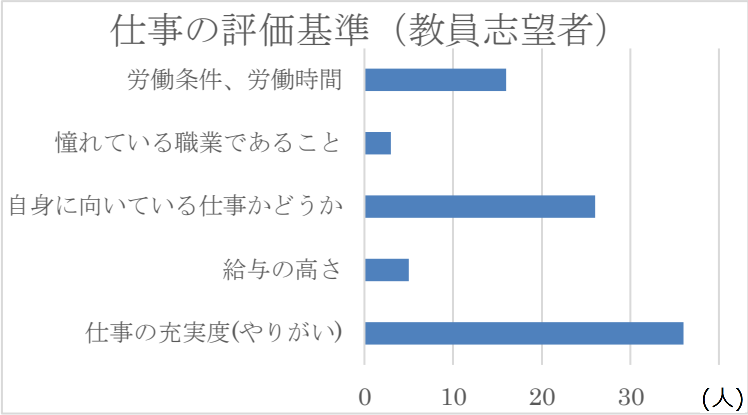
教育学部生に対するアンケート調査の中で、学年別の教員志望者の割合は次のようになった。



教員養成課程１年生でも多くの学生が「迷っている」事が分かった。全体の傾向として、学年が進むにつれて、迷っている学生が志望していない学生、志望している学生に二分されていくという、先行研究と似た結果が得られた。３年生の教育実習体験を経ることで、自分が将来働いている姿を具体的に描けることで教職志望が固まることが予想できる。また、この時期はインターンなど就職活動も始まることもあり、決断を迫られ志望が揺らぐことを許さない状況が生まれる時期でもある。この進路決定を時期までに、十分な実体験を経ていることが、不本意な進路決定を避ける上で必要不可欠なことであろう。一度迷うことを経て、教育実習のような実体験を経ても、教員志望が変わらず維持される中に、学生がどのような要素でその判断をしたのかというところに注目する必要がある。その仕事の充実度ややりがいを「実体験する」ことが重要であるのか、後に調査内容から考察していきたい。

それらの予想を含め、このようなサンプルを参考にしたアンケート調査をもとに、現れた傾向を以下にまとめていく。

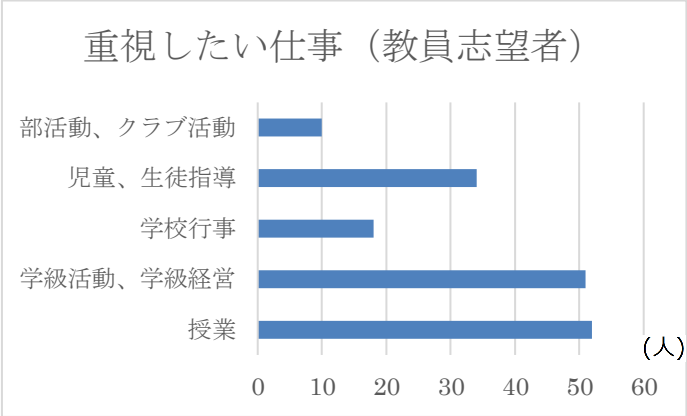
教員志望者



上のように、教員志望者の最も重視したい仕事の評価基準は、仕事の充実度の割合がダントツとなっている。一方で、教育学部でもずっと憧れていた職業であるからという理由で教員を志望している学生は意外にも少なかった。

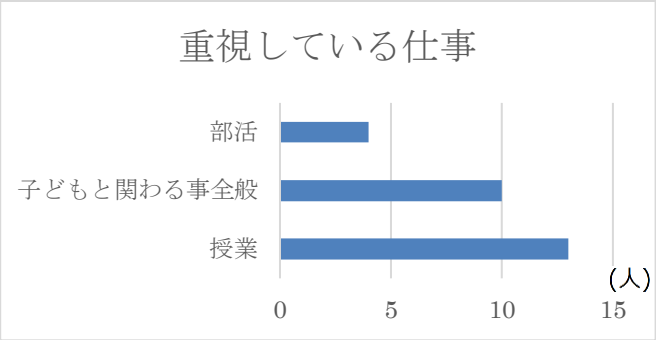
大学生となり、様々な職業や就職に関しての情報が得やすい環境の中でも教員を志望している学生は、ある程度職業としての教員の現実と向き合いつつもその職業の魅力を自分なりに理解し、志望していると考えられる。また、大学生活で教育実習の他にも、アルバイトやボランティア活動などの実体験を通して、「仕事のやりがい」の重要性を理解し、実際に仕事を選ぶ際にもその評価基準を重要視している可能性もあるのではないかと考えられる。

次に、教職志望者の重視したい仕事について、教員志望者と現職教員の比較を行った。



授業、学級、児童生徒など、子どもと直接かかわる日常の機会を重視したいと考え、選択している学生が多い。

（参考）現職教員の場合



現職教員は実務を通して、経験から重視するべき仕事を選んでいると考えられる。

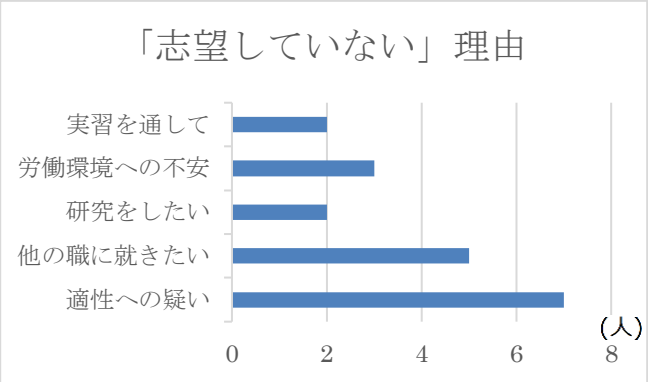
そのうえで、授業が最も多くなっているのは、授業を通しての生徒の変化を実感した経験を通して回答しているからであると考えられる。また、「子供と関わる事全般」という意見は、学校生活すべてを通して子どもと向き合っているという事、全てが子どもに影響を与えているといった意見であると考えられる。

そのうえで教員志望者の回答に多かった「授業」、「学級活動・学級経営」、「児童生徒指導」といった子どもと直接かかわる日常の機会を重視したいという意見は、現職教員とおおむね一致していると考えられる。これらの結果から、教員志望者は教職の現状を講義や実習、または自分で調査、経験していく中で教員にとって大切だとされていることを理解し、現場で何が求められているのかを踏まえて教員を志望していると考えられる。

現在教員を志望していない学生

教員を志望していない学生の状況を見ていく。

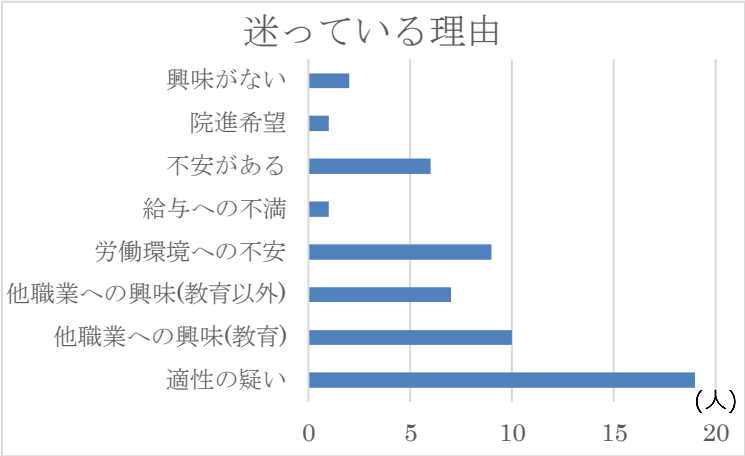
現在教員を志望していない学生にその理由を聞いたところ、その多くが「自分に教員が向いていると思わない」といった「適性への疑い」を挙げていた。



現在「適性への疑い」が理由で教職を志望していない学生は、その多くが大学入学以前には教員を志していた学生であった。大学生活を通し、教員について学ぶ中で、教員になることを現実的に捉えた際に、不安を感じる学生が多いことが考察できる。その不安の中身に関しては後に詳しく考察する。

現在教員になるか迷っている学生

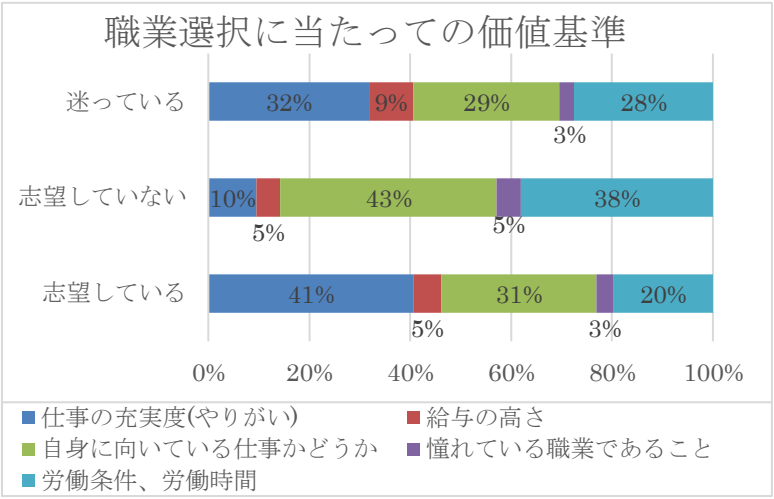
教員になるか迷っている学生の状況においても、その状況になった理由には「適性への疑い」が最も多く挙げられた。また、迷っている学生に特徴的であった回答が「他の職業への興味がある」といった回答の多さであった。



「適性への疑い」が理由で教職に就くか迷っている学生も、その多くが大学入学以前には教員を志していた学生であった。「志望していない」学生と同じく、教員になることを現実的に捉えた際に、不安を感じる学生が多いことが考察できる。こちらに関しても後に詳しく考察する。

また、他の職業と迷っている学生も特徴的だった、高校までと比べ、大学から発信される様々な職業の情報や、他学部の友人から他業界の情報を取り入れやすくなった事等により、他の教育関係の仕事に興味を持つことや、もともと教員を目指していた学生にもほかの働き方への迷いが生じていることが考えられる。

「職業選択に当たっての価値基準」の比較



全体が「自身に向いている仕事かどうか」を大きく重視している事が分かった。「適性」が教員志望でない、もしくは迷っている学生の現状を作る理由になっているため、この「適性」に対する学生の考えが考察のポイントとなりそうである。主には、情報化社会の進行により、多くの職業の情報にアクセスしやすくなったことから、選択肢が広がり、自分の専門分野以外への就職もしやすくなっていることから、もともとどのような職業を志望していた学生でも、「より自分に向いている仕事があるのではないか」という発想が生まれやすくなっているのではないか、と考察できる。

また、学生の教員志望状況ごとに大きく差が見られたのは「仕事の充実度」の項目で、志望していない学生の多くは「やりがい」が仕事としての良さであるという実感がもてず、仕事の価値を見出していないことが分かった。近年「ブラック企業」の情報も共有されやすくなった時代で、「やりがい搾取」といった言葉も広く聞かれるようになり、多くの学生が「労働条件、労働時間」を重要視していることからも、学生の期間の様々なきっかけでこの「やりがい」に対する考え方が変化しているのではないかと考えられる。

<u>アンケート調査全体を受けての考察</u>

これらの調査結果から考察すると、学生はマスメディア等を通して得られる「世間から必要とされる教員像」を正しく理解して描いたうえで、その姿と自らを重ね合わせ、実際に教員を志望するかどうかを判断していると考えられる。

大学生となり、就職を間近に控え、職業や働き方のより多くの情報を得たうえで、職業選択の際には抽象的な教職「観」の次元ではなく、将来職に就いたときの「教員としての自分の姿」を具体的なイメージとして捉えられるかどうかで、実際に「自分に出来る仕事なのか」否かを判断し、そのうえで個人の経験を通して変わる具体的な「教職イメージ」を作り出すのではないか。その中で、「やりがい」や「労働条件、労働時間」といった自分が仕事に求める評価基準にも合致するかを考察し、実際に就職する職業を選択していると考えられる。

5．教員に対するインタビュー調査の結果

<u>調査内容</u>

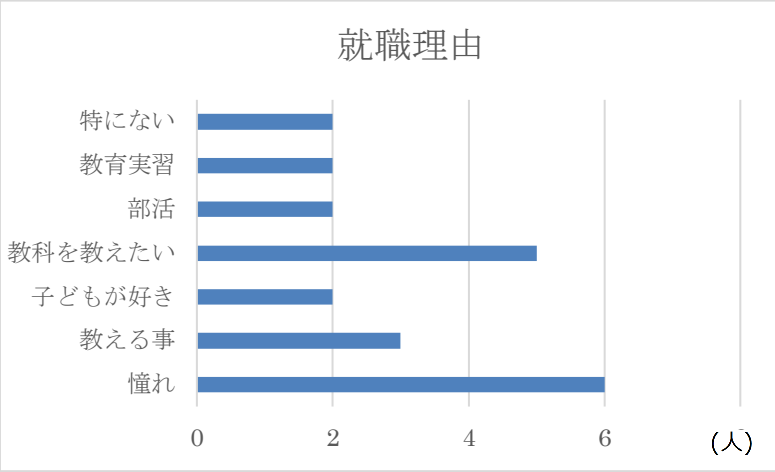
今回、実地研究校（中学校）にて現職教員に対してもインタビュー調査を行った。

主な調査内容は次の通り

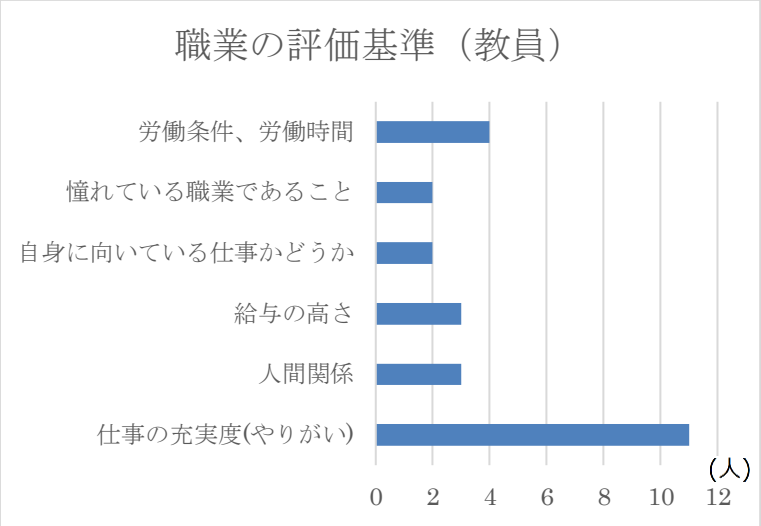
・教職を選択した理由
・職業選択（職業の評価）に当たっての価値基準
・重視している、重視したい仕事

<u>調査結果</u>

「教職を選択した理由」は、「教職への憧れ」、「教えることが好き」など、教員志望者と大きな違いはなかったが、「担当教科を教えたい」という項目が上位に来ているのは、教科担任制である中学校の特徴であるといえる。



「職業の評価基準」の項目でも、教員志望の学生と大きな違いは見られず、「適性」に関しても「いまだに向いているとは思っていない」という声も見られるなど、学生と大きく違う点はなかった。

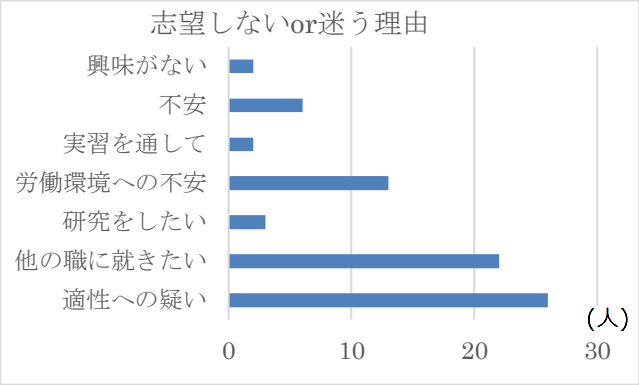


このことから、教員として実務を経験していくことで変化していく価値観はもちろんあるはずだが、その中でも仕事の充実度や、やりがいといった価値観は多くの現職教員が大切にし続けていることが分かった。教職に関して、「自分に出来るのかどうか不安」といった理由のうちには、「自分の大切にしている事が本当に必要とされているのか、そしてそれを自分が過酷な現場の中で将来貫き通せるのかどうか」といった部分があると考えられるが、少なくとも現職の教員に関しては「憧れ」を理由に就職し、現在もその職業の仕事を出来ることに「やりがい」を感じていることが見て取れるため、教員は自分の中の大切にしたい価値観を貫くことが出来る職業といえるのではないかと考えた。

実際、再任用の教員からも、就職するときに大事にしていた「やりがい」や「教科が好き」といった価値観を40年以上経った今でも大切にしているという声も聞くことが出来た。

６．教員の適性に対するマッチング不安の解消について

これらの調査のなかから、特に教育学部生の進路選択に影響与えていた「教員の適性への不安」に焦点をあてる。志望していない学生と迷っている学生をまとめるとこのようになった。



教員を「志望していない」もしくは「迷っている」と回答した学生の多くが、その理由として「自身の教員としての適性への疑い」を挙げていた。これは、先述の教育学部以外の学生を対象にした調査では得られなかった傾向であり、新入生の多くが教員を目指し入学する教育学部ならではの傾向であるといえる。

また、「志望していない」理由には

・大学で学ぶうちに自分には荷が重いと感じるようになった
・教師の労働環境、教師をめぐる環境、同期と比較して自分のできなさを痛感した
・自分の特性が教職に就くにあたり不適切と感じた
・「子どもが好き」という感情だけで、頑張れると思えなくなってきた

といった意見があった。また、「迷っている」理由には、

・過酷な労働環境が問題となっているから
・教師にもともと憧れはあったが、あがり症でコミュニケーションが苦手な自分には向いていないように感じる
・教師という職業に憧れて大学進学したが、自分には向いていないような気がしてきた
・教員になりたいと思って入学はしたが、大学で現場の様子や教員に求められる力を学んで、自分に務まるのか不安を感じ始めた
・自分の性格をよく考えてみて、本当に教員になれるのか不安になってしまった
・講義で教えてもらった教員になれそうもないと教員という職が少し怖くなった
・自身の熱量が足りていないと感じ、子どもと向き合うことが失礼になると感じた
・実習に行って、自分の理想と現実のギャップを痛感し、自分に向いていないと思った

といった意見があった。

上記の通り、大学での講義、教育実習や報道などのきっかけや、求められる教員像を学ぶ中で、自分と比較し自信を無くしてしまったという意見が多くあった。

これらの学生は教職に就いた時の自分の姿をイメージしたときに、様々な媒体から得た情報により形成された「世間や周囲から求められる教員像」と比較するあまり、「本来の自分が活かせるかどうか」を考えられないことが問題となると考えた。

教員の適性とは

先述の現職教員へのインタビューの中で「教員の適性」についても意見を聞くことが出来た。その中で、

・前提として子どもが好きであること
・学ぶ姿勢
・謙虚さ
・責任感
・授業の上手さ
・コミュニケーション能力

など、様々な意見を聞くことが出来た。他にも一般的に想像がつくものとして、「子どもの集団をまとめる力」、「分かりやすく説明する力」、「学校の細かな仕事をこなす事務処理能力」などがあげられるのではないか。しかし、そのように「教員の適性」を挙げていくと限りがないのではないか。「そのような限りのない条件をすべて満たしている現職の教員はいないだろうし、ましてや新卒の学生ではいるはずがない」と考えられる。

なぜ教員の適性に対して不安を持つ学生が多いのか

それではなぜ教員への適性に対して不安を持っている学生がここまで多いのか。それには時代背景が関係しているのではないかと考えられる。現代の情報化社会に伴い、インターネットをはじめ様々な情報により多くの人がアクセスしやすい世界になった。それにより、「教員とはいかなる職業か」、「教員とはどうあるべきか」、「教員になるには何をするべきか」といった教員になるにあたり活きる情報に加え、「このような人は教員には向いていない」、「教員としてこのような行動はふさわしくない」といったネガティブな情報もより多く目に入るようになった。その中で、情報を味方につけ、「このような教師になれるよう努力しよう」と自らの進む道に活かすことで精神的に強くなることが出来る学生もいれば、情報によってよりネガティブな方向に進み、「私にはこのような教員にはなれない」と考え、精神的に弱くなってしまう学生も当然存在するのではないかと考えた。

７．終わりに

「自分だけのなりたい教員像」を作る

教員を目指す学生には、実際の多様な教員の在り方を示すことで、自身の個性を曲げずに活かせるような具体的な教員像を形成する必要があると考えた。具体的には、外部情報によるものだけで形成されていない「自分だけのなりた

い教師像」を作っていくことを提案したい。

教員を目指す以上、より良い教師を目指して自己研鑽をしていくことは間違いないが、その際に目指す教員像を外から求められる「教師とはこうあるべき」という物を基準にするのではなく、自分の個性や良さを活かせるような「私はこのような教師になりたい」といった自分の中の具体的な教員像を作っていくことが必要なのではないか。

当然、各教育委員会が公表している「求められる教員像」などをもとに、世間に求められる教員としての資質を高めることも重要であるが、それのみを当てにしていては、教員の現実(世間に求められる物事)を知れば知るほど難しいものと考えてしまう事が予想できる。事実、本学教職実践センター関口教授にインタビューを行ったところ、一学年の「教職入門」の授業の中では、学校現場の現実の話や、実際の教員の一例の授業を行った後、「教員が100%この通り出来るものではない」と話をしても、学生からは「教員は大変だと思った」、「本当に教員としてやっていけるのか不安になった」という感想が多く寄せられるとの話を聞くことが出来た。

目指している「理想の教師像」が遥か遠くにある抽象的な「教職観」のままでは教職という仕事自体を「自分には無理」と諦めるのも無理はない。それゆえに、自分につながる、自分の個性が活かせる、自分だけの具体的な「なりたい教師」の姿を作っていくことで、その姿に近づくための見通しを持ち、実践していける事が見えてくるのではないかと考えた。

そのように自分のなりたい教師像に近づく具体的な道筋を描くことで、「自分だけのなりたい教師像」を作り出すことが必要なのではないか。

実際、文部科学省(1997)の「これからの社会と教員に求められる資質能力」には、「得意分野を持つ個性豊かな教員」が必要であり、「画一的な教員像を求めることは避け、生涯にわたり資質能力の向上を図るという前提に立って、全教員に共通に求められる基礎的・基本的な資質能力を確保するとともに、積極的に各人の得意分野づくりや個性の伸長を図ることが大切である」と論じられている。外から求められる教員像にとらわれることなく、「自分だけのなりたい教師像」を追い求めてほしい。

「自分だけのなりたい教師像」を作っていくために

先述した自分の強みや個性を活かした、自分だけのなりたい教師像を作っていくにあたり、学生の皆様には、座学のみでなく、「実体験を通してどのように教師としての仕事を実践しながら考える中で見つけていく」ことを提案させていただきたい。

教職に就いて学ぶ大学の講義や書籍等を読む座学のみで作られる「理想の教師像」は、遥か遠くにある抽象的な「教職観」のままであり、その中に自分を重ねることは難しい。そこで、教育実習のみならず、教育現場でのボランティア活動やアルバイト、さらには教育に関することでないサークル活動や課外活動など、「学生時代に自己を発揮し頑張ったこと」を作り、その中で分かった自分の個性や強みを活かした「自分のなりたい教員像」を作り、教員になった後も自身の経験や成長に合わせてその教員像を更新し続けて欲しいと思う。

当然、経験を通して教員以外の道に進むことを自身が望むのであれば、是非ともその道を進んでいただきたいと思う。

「自分に適性があるか悩んでいる」学生に向けて

ここまで「教員の適性」について記述してきたが、そのうえで現在自分が「教員に向いているのか不安である」と悩んでいる学生こそ、教員に向いているのではないかと私は考える。

先述の現職教員へのインタビュー調査や、本学教職実践センターの実務家教員へのインタビューの中で、「どのような学生に教員になってほしいか」といったことも聞いてみた所、特に多く聞かれた意見には、

・誠実であること
・謙虚であること
・探求心、学ぶ姿勢を持っていること

といったものがあった。

教員を目指すにあたり「自分が教員に向いているのかどうか」悩む学生とは、「子どもに適性を持った人間から学びを得てほしい」という誠実性や、自分の能力におごらない謙虚さ、「今の自分ではまだ足りない、すなわちさらに学ぶべき」という学ぶ姿勢を持つことを意味すると私は考える。すなわち「自分に適性があるか悩んでいる」という事実は、これだけ多くの教員の適性を満たしていることを表している。

そのような学生にぜひ、教員という道を目指していただき、自分だけのなりたい教師像を作っていってほしい。

８.参考資料

・文部科学省.「令和３年度公立学校教員採用選考試験の実施状況のポイント」:2021
・関西国際大学,「教師の力量形成の変容」:関西国際大学研究紀要, 2019, 第 20 号, p15~35
・立教大学, 「大学生の教育観・教職観の形成過程」: 立教大学教育学科研究年報, 2013, 第 56 号, p91~153)
・脇本健弘・町支大祐,「教師の学びを科学する」: 北大路書房, 2015, p233
・埼玉大学,「今後の教育学部における教職支援の在り方―教職志望率向上のための一考察―」, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 2020, 第 18 号, p1~8